

漢法苞徳塾資料	No. 142
区分	総論
タイトル	鍼灸学について
著者	八木素萌
作成日	1990.04.26

◎漢法医学が近代西洋医学と際立って異なっている問題では、重要な点が幾項目かがある。それは、

- a. 動態構造論的平衡の医学である事、
- b. 機能論的臓腑観で全身の生理的機能を此処に（機能論的五臓に）収斂させて把握している事、
- c. この五臓に見出している五行性が自然界に存在する五行性と密接に関連している点を具体的にも象徴的にも把握している事、
- d. 生体の動態構造論的平衡の持っている全一的統合性が五臓間の機能的平衡の力を根としエネルギー原としている経絡の機能的体制によって作られ保たれていると見なしている事、

など等であろう。

とりわけ特徴的なものは生理的な機能体制として経絡の体制を認識し措定している事である。

◎経絡の体制とは、

- a. 正経（十二正経）  
経絡と言う時はこれを指す場合が多い。
- b. 奇経（八脈）  
任脈と督脈は、その経の穴（孔穴）をもっているが、任脈・督脈以外では穴はその経独自のものではなくて正経の穴を借用している。これは臓腑との直接的な接続をしていない。
- c. 経別（「合」とも言う）  
正経の表裏のセットである、しかし、独自に臓腑との接続線を持っており、臓腑に作用する力が大きいと認識されている。
- d. 皮部  
体表の最も浅い表面で、これが全表面を隙間なく覆っていて、それぞれの脈は一定の領野を持っている。「経水」の流注が流注していると考えられているのも、この表面である。
- e. 絡～十五絡脈と十五絡穴で構成され主に表裏経の間を繋いでいるが、流注はたんに両経の間を接続させていると言う単純さでは無い。

また、あるライン（ある絡脈…「足太陰の別」－〔其別者・入絡腸胃〕＝公孫、「手少陰の別」－〔循経・入于心中〕＝通里、)のみが内臓への流注を持ち、また体腔内に流注するもの（「手

陽明の別」－〔其別者・入耳・合于宗脈〕＝偏歴、「手少陽の別」－〔外澆臂・注胸中・合心主〕＝外関、「足陽明の別」－〔上絡頭項・合諸經之氣・下絡喉嚨〕＝豊隆、「足少陰の別」－〔其別者・并經上走于心包下〕＝大鐘）もある。

「絡」と呼ばれるものは、この十五絡脈（大絡とも言う）のみでは無い。「筋絡」「浮絡」「血絡」「細絡」「孫絡」などと言われているものがある。また、『素問』刺腰痛第41に出ているが、特有の名前を持った絡脈があり、また、今日「孔穴」＝「穴」＝「ツボ」と呼んでいるものが、「絡」と記述されている所が『素問』『靈樞』にも何ヶ所もある、この様に、「穴」にもそこから周辺に影響を及ぼす仕組みがある事が認識されている。

#### f. 経筋

十二のラインがあり、正経と同じ名が付けられている。

『痺論第43』の記述と深く関連しておる、今日言う所の「神経痛」や「リュウマチ」および、それ等に近縁の病症の治療に関係が深い。

◎経絡の体制を詳しく見ると、以上の要素が複雑な構造をもって、極めて有機的な一連の態勢を形成しており、大きな生理的なシステムとなっている。このそれぞれには特有の病証が記述されているものであり、それぞれに体内流注があり、交会穴や「結ばれる所」があり、他の経絡的要素と影響を及ぼし合う所と言う性質が認識されている。鍼灸術は、このシステムを運用して、病苦に対処するものであり、このシステムの性質や、他経との関連性や、運用法則～如何なる状況・如何なる条件の場合に、何れの経絡システムを選び出して、如何なる手技を施術すれば良いか、これを主題としている学術が、鍼灸医学であると言えるものと思う。

これを理解し研究する為の論理学と方法論が、陰陽・五行論であり、運氣論や剛柔・子午論であると言えるであろう。具体的な知識が経絡学であり、運用論が配穴・撰経論（中国では「配穴処方学」と呼んでいる）である＝つまり、経絡を運用するための研究分野である。

◎選経・配穴論（＝配穴処方学）の問題では、日本では『難経』六十九難の原理を具体化した方法が主なものになっており、奇経治療方式を称えるグループは八宗穴の四セットの運用を主としている。

中国では日本の「経絡治療」の配穴原理を「五行配穴法」と呼んでいる。日本で用いられている配穴原理は、反応点・圧痛点療法は問題外であるから、これは計算に入れずとして、六十九難・七十五難の方式（中国風に「五行配穴法」と表現すると）、八宗穴運用法、一部で子午配穴法（納子法・納甲法・靈龜八法・飛騰八法・華佗子午法があるが、我が国では八宗穴運用法と混同されているし、そうでない場合でも、これ等の方法のうち極く少数の者が用いても、これらの方法のうちの一種類のようなものであるから、これを一つに計算して置く）、医易配穴も皆無では無いからこれも勘定しても、四種のみである。しかし、最も多く運用されている方式は、「経絡治療」の「五行配穴」法である。

近年中国から入ってきている文献を見ると、著者によって相違はあるが、二十種類前後の原理が記述されている。この様に多種類の配穴原理の運用基準は、未だ必ずしも明らかでは無い。羅列的と言っても良い様である。しかし、これ等の原理を学習し把握していなければ、その運用基準を決定する為の仕事も出来ないであろう。

◎この他に、経穴を正確に取り、経穴の特性や治効を知り、経穴相互の特殊な関連性もしくはセット性の問題は、独立した側面があるから、これを知り、また、運用の手順によって、或は施術手技との関連によっても、生じてくる治効の相違などと言う側面もある。こう言う意味から、経穴学は独立させられている研究分野である。

◎原穴・絡穴・郄穴・交会穴・兪穴・募穴・八会穴・八宗穴・四宗穴・四海穴・四街穴・五行穴・下合穴・標本穴・根結穴・特殊的なセット穴・その他の重要性の高い穴（私方穴もある）・新穴などがある。

経穴の記述されている治効は、多くの場合、その穴と他の穴とがセットされた時に認められるもので、その経穴単独の特徴的で個性的な特殊治効を持っているものは、極めて少数であるように見受けられるが、この様なものは重要性が高い。故に「経穴学」も独立した分野と理解して、大いに研究すべきものである。

◎手技と生体側の生理的反応との関係も、独立的に研究する必要がある分野である。その前提として手技の研究が必要である。

現代刺鍼手技・杉山流基本手技・素問靈枢に記述されている手技・現代中国重要基本手技・特殊鍼手技・新技術関連（エレクトロニクスなどの新しい科学技術を応用した種々の治療器具が続出しているので、これを用いて治療する場合の手技的な問題＝補瀉論との関連を無視した器具が多いので検討を要する事項が多い）

◎診断→方針→処方→手技技術→評価→予後判断→指導指示、こういうものが治療行為である。その為、上に記述した分野の他にも多くの事を学習しなければならないのは、言うまでも無いことであろう。

◎現代医学の学習科目になぞらえて表現すれば、解剖生理学と病態学に相当する部分が「経絡学」「病証学」「臓象学」「病機・病因学」など、薬物学に相当する部分が「経穴学」、処方学に相当する部分が「配穴処方学」、調剤学や手術術式に相当する部分が「手技論」「手技実技研修」であると言う事が出来るだろう。

以上